

平成 27 年度 兵庫丹波の森協会
魅力ある地域づくりの推進
丹波の森研究所の充実

平成 27 年度
丹波の森研究所活動報告

報 告 書

平成 28 年 3 月

(公財) 兵庫丹波の森協会 丹波の森研究所

目 次

はじめに

1 平成 27 年度調査研究・活動報告

(1) 地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）

- 1) 篠山市篠山地区（上岡研究員）……………1
- 2) 篠山市東岡屋地区（横山研究員）……………1
- 3) 丹波市大名草地区（横山研究員）……………1

(2) 美しい村づくり支援事業（まちづくり活動助成）

- 1) 地球育ミュージアム研究会（上岡研究員）……………2

(3) 地域づくり支援事業

- 1) 丹波地域まちづくり交流会……………3
- 2) 丹波篠山ひなまつりコーディネーター事業（上岡研究員）……………4
- 3) 企業と住民の協働による企業の森・里づくり（門上_{幸子}研究員）……………7

2 調査研究（自主研究）

(1) フィールドミュージアム「コア施設」の研究（塩山研究員）……………9

(2) 6次産業化に関する基礎調査（門上_{幸子}研究員）……………10

はじめに

丹波の森研究所は、「丹波の森構想」（人・自然・文化・産業の調和した丹波地域づくり）を推進するシンクタンクや支援組織をめざして、平成 8 年（1996 年）、財団法人兵庫丹波の森協会によって設けられました。中瀬勲所長を中心に、地域づくりに関する諸分野の研究員 10 名で構成されています。

主たる業務は、地域づくりにおける相談、アドバイス、情報提供、学習会などを通じた地域づくりの支援のほか、丹波の森づくりに関する調査研究、講演や報告会などを通じた啓発・普及、行政の施策・事業に関するアドバイザー協力を行うほか、「たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会」の事務局を担っています。

丹波の森研究所 所員 （平成 28 年 3 月現在）

研究所所長	中瀬 勲（丹波の森公苑長兼務）
研究所次長	堀毛 宏章（丹波の森協会事務局長）
主任研究員	門上 保雄
研究員	山本 茂
	横山 宜致
	上岡 典子
	森岡 武
	片平 深雪
	塩山 沙弥香
	小橋 昭彦
	出町 慎
	門上 幸子
	大久保 省良
高田 晋史	

1 平成 27 年度調査研究・活動報告

丹波の森研究所は、丹波地域の地域づくり（活力と魅力ある地域づくり）を自主研究・事業の中心テーマとして、各地域の支援を実施してきました。

近年、篠山市、丹波市ともに、小学校区（地区）ごとに設置されたまちづくり協議会や自治協議会などを中心とする地域づくりが進められています。丹波の森研究所は、このような動向を踏まえつつ、地域・行政と丹波の森研究所が情報を共有しながら、①地域づくり支援事業（アドバイザー派遣）、②美しい村づくり支援事業、③調査研究の 3 つの側面から支援していくことを基本方針として、次のような事業を実施しました。

（1）地域づくり支援事業

「アドバイザー派遣事業」

1) 篠山市篠山地区（上岡研究員）

- 協議会等の名称：丹波篠山ひなまつり実行委員会
- 協議内容：ひなまつりコーディネート
- 派遣期間：平成 27 年 9～平成 28 年 3 月（3 回）
 - ①平成 27 年 9 月 16 日
 - ②平成 27 年 11 月 28 日
 - ③平成 28 年 3 月 17 日

2) 篠山市東岡屋地区（横山研究員）

- 協議会等の名称：東岡屋自治会
- 協議内容：東岡屋公園（悠々の森）検討会
 - ・公園改修プランと緑化ウォールの検討
- 派遣期間：平成 27 年 5～6 月（5 回）
 - ①平成 27 年 5 月 11 日
 - ②平成 27 年 5 月 24 日
 - ③平成 27 年 5 月 29 日
 - ④平成 27 年 5 月 31 日
 - ⑤平成 27 年 6 月 30 日

3) 丹波市大名草地区（横山研究員）

- 協議会等の名称：神楽自治振興会
- 協議内容：地域づくり 10 年計画策定
- 派遣期間：平成 27 年 10～12 月（3 回）
 - ①平成 27 年 10 月 22 日
 - ②平成 27 年 11 月 17 日
 - ③平成 27 年 12 月 27 日

(2) 美しい村づくり活動支援事業

1) 平成 27 年度 地球育ミュージアム研究会

(上岡研究員)

●趣旨

- ・丹後、但馬、丹波の、三たん地方の環境拠点が連携し、相互啓発を図るとともに、環境保全、環境学習、環境ツーリズム振興等、環境を活かした発展と三たん地方の絆をはぐくむ事を目的に、そのあり方を探求し実践する。

●めざす成果

- ①基本サービスを磨く
- ②環境学習の質の向上
- ③環境ツーリズムの振興
- ④地域の資源保全マネジメント

●これまでの経過

- ・第 1 回 (H26 年 8 月 5 日) 見学/研究会立ち上げ、方向性協議 (於: 琴引浜鳴き砂文化館)
- ・第 2 回 (H26 年 10 月 21 日) 見学/管理運営評価および会則について協議 (丹波の森公苑, 並木道中央公園)
- ・第 3 回 (H26 年 12 月 9 日) 見学/巡回パネル展および会則について協議 (山陰海岸ジオパーク館)
- ・第 4 回 (H27 年 3 月 10 日) 見学/手簿プログラム体験/会則施行 (丹後海と星の見える丘公園)
- H27 年度一議論を深め、研究会の社会認知をはかるキックオフのステージ
 - ・「巡回パネル展」の実施
森公苑(H27 年 2 月)→琴引浜鳴き砂文化館(H27 年 3 月)→海星公園 (H27 年 5 月)→コウノトリ文化館 (H27 年 6 月)→ジオパーク館 (H27 年 7 月)
 - ・第 5 回 (H27 年 5 月 19 日) 見学/田んぼの学校プログラム体験/環境学習について協議 (於: コウノトリ文化館)
 - ・役員協議 (H27 年 6 月 15 日) 研究会の 2 年目の進め方について協議 (於: 丹波並木道中央公園)
 - ・第 6 回 (H27 年 7 月 7 日) インバウンド活動紹介、研究会のあり方、環境学習について協議 (琴引浜鳴き砂文化館)
 - ・「トークセッション」の開催 (H27 年 10 月 25 日, パネルブース展同時開催)
 - ・第 8 回 (予定 H28 年 2 月 16 日) 環境学習について (話題提供 しまなみアースランド)、次年度連携活動について協議 (於: 丹波並木道中央公園)

●H27.5.19 第 5 回研究会 ビオトープ体験、環境学習について意見交換 (コウノトリ文化館 見学)

- ・来訪者の視点に立った施設運営について・・・何をどう伝えるか～をテーマに意見交換を行った。環境学習をどのように捉えるかという点については、‘命のはかなさを体感する事の必要性’ ‘教育か学習か。学ぶ側が主体、子ども目線が重要’ などの意見が出された。
- ・環境学習へ環境拠点はどのようにアプローチするかという点について、‘環境拠点から、学校、地域、家庭と異なる環境学習の新しいステージの形成を’ ‘知識の伝達→感じる、楽しむ、面白さの共有が必要→遊びから、各専門性に裏付けられた体験へ、生活科とタイアップした出前講座や、学校教育に対するプログラム提案が必要’ などの意見があった。



●H27.7.7 第 6 回研究会 (琴引浜鳴き砂文化館)

- ・環境教育について意見交換、鳴き砂文化館のアサギマダラ、教育旅行等の活動紹介
- ・鳴き砂文化館におけるアサギマダラ観察会、試験実施した韓国高校生の教育旅行の受け入れ等、環境学習関連の取り組みを紹介頂く。
- ・二年目の研究会のあり方について意見交換を行い、本研究会の社会認知を広げるため、海星公園で開催されるアースデイにおいてパネルディスカッションを開催することを検討することと決定する。
- ・環境学習 (環境拠点からの展開の可能性) について意見交換を行う。



- H27.10.25 アースデイ（アースガーデン宮津 2015）にて地球育ミュージアム・トークセッションを実施
- ・本研究会の取り組みを広く周知する機会として、アースデイ・イベントのプログラムの一つとして、地球育ミュージアム・トークセッションを実施。
- ・ブースの一つで、パネル展を実施。



- H28.2.16 第8回研究会(丹波並木道中央公園)
- ・しまなみアースランドから話題提供、次年度の連携活動について
- ・しまなみアースランドから会議参加の打診があり、活動内容等について紹介を受ける。
- ・次年度の展開について、現場の若手の交流の場を設けることが決定し、次回、若手会として開催を予定。



(3) 地域づくり支援事業

1) 丹波地域まちづくり交流会」

- 開会 あいさつ 柳瀬 厚子 丹波県民局長



●事例発表【地域交流・活性化の取組】

- ①発表者：向井 祥隆 氏

県民交流広場全県連絡協議会 副代表
日置地区まちづくり協議会 事務局長

- ・本年 10 月 18 日に丹波の森公苑で実施したイベントの概要報告



- ②発表者：大谷 吉春 氏

丹波市芦田自治振興会 会長

- ・多世代交流による地域の課題・危機感の共有

●パネルディスカッション

- 一移住者の視点・活動を活かした取組一

- ①コーディネーター：中瀬 勲 氏

県立丹波の森公苑長

県立人と自然の博物館館長

②パネラー

(1) 篠山市村雲地区

発表者：加古佳与子氏（京都府から1ターン）

発表者：栗野 勝浩 氏

篠山市村雲まちづくり協議会 会長

(2) 丹波市神楽地区

発表者：島元 恵子 氏（大阪府から1ターン）

発表者：足立 德行 氏

丹波市神楽自治振興会 理事長

●交流会

- 発表者、参加者の情報交換（自由参加）



(3) 地域づくり支援事業

2) 丹波篠山ひなまつりコーディネーター事業

(上岡研究員)

●コーディネーター日程

- 平成 27 年 5 月 7 日：第 7 回企画女子部会
- 平成 27 年 7 月 13 日：第 1 回実行委員会
- 平成 27 年 9 月 16 日：事務局協議
- 平成 27 年 9 月 25 日：第 1 回企画女子部会
- 平成 27 年 10 月 29 日：第 2 回企画女子部会
- 平成 27 年 11 月 1 日：中世木棚田ひな祭視察
- 平成 27 年 11 月 18 日：第 3 回企画女子部会
- 平成 27 年 11 月 27 日：丸山着物体験協議
- 平成 27 年 12 月 15 日：第 4 回企画女子部会
- 平成 28 年 1 月 28 日：丸山着物体験チラシ
- 平成 28 年 2 月 10 日：第 5 回企画女子部会
- 平成 28 年 3 月 3 日：銀谷の雛まつり視察
- 平成 28 年 3 月 4 日：プレスリリース案作成
- 平成 28 年 3 月 4 日～：情報サイト掲載依頼
(「じゃらん」「JR おでかけネット」「いこーよ」
「YAHOO ロコ」「グノシー」「日本の歩き方」「パンフ
Navi」「ひょうごツーリズムガイド」)
- 平成 28 年 3 月 12 日：滋賀県雛祭り視察
- 平成 28 年 3 月 17 日：市野々アドバイザー支援
- 平成 28 年 3 月 18 日：市野々ガイドマップ作成
- 平成 28 年 3 月 19 日：開催状況確認
(城下オープニング、雲部、市野々、チルミュー、福住)
- 平成 28 年 3 月 21 日：開催状況確認 (今田)
- 平成 28 年 3 月 23 日：開催状況確認
(大書院、青山歴史村、安間家、日置)
- 平成 28 年 3 月 26 日：丸山外国人着物体験
- 平成 28 年 3 月 27 日：開催状況確認 (城下町)

●丹波篠山雛まつりの個性

《 座談の交流 》

他の多くの雛めぐりイベントでは、商店の窓辺あるいは一般家屋の玄関脇の小間に飾られた雛人形を立ち止まって眺めるタイプのものが殆どである。丹波篠山では、家屋に上がらせて貰い、畳に座して庭などとともに雛人形を鑑賞したり、地元の人と話をしたりできる箇所が多く(福住一さんば屋ひぐち・わだ家、日置一中立舎・ささらい、市野々一自治会館、丸山一公民館、城下町一陶々庵、鳳凰会館 8箇所)、女子の成長を親族や近隣とともに祝う古来の姿に近く、足を延ばして味わう価値のある時間を生みだしている。今後も、こうした訪問客と地元の人、あるいは訪問客同士が、雛人形や庭を鑑賞しながらゆったりとした時を持てる

という座談の魅力を持ち続けて頂きたい。

《 前例のない里山集落の雛めぐり 》

- 他の雛めぐりは、限られたエリアの「城下町」「宿場町」あるいは「商店街」などにおける開催である。丹波篠山では、城下町や街道村だけでなく、丸山や市野々などの「里山集落」と今田の「陶芸の里」など、市域全体に開催地が及び、開催地のタイプが多様性に富んでいる。
- なかでも市野々や丸山などのような「里山集落」における雛まつりは、他の雛めぐりに例がない。丹波篠山の雛まつりの大きな個性となるものであり、特に都市部や外国からの来訪者にとって、里の美しさを座してゆったりと味わえる事は大きな魅力であると思われる。
- さらに市野々における、田んぼや里山などを含め集落全体を会場とした展開は、雛めぐりとして新しいモデルを示されたと言える。

《 高い文化性 》

- 拠点会場での千体雛など人形の数で魅せる、商店街のショーウィンドウに高度成長期の既製品の雛人形が並び、といった量の特徴とした文化性の乏しいものも多い。丹波篠山では、豪商などに見られる極めて豪華な雛人形はないものの、今回クローズアップされた稲畑人形はじめ、江戸から明治、大正、戦前頃までの、品格のある古典雛が、城下町だけでなく、丸山、市野々など縁辺地域にも数多く保存されていた。さらに稲畑人形展や作家の講演会、今田の陶雛展示、福住の手芸作品展示、丸山の雛人形コレクション展示などが行われたことにより、丹波篠山の雛めぐりは、文化性の高いものとされていた。

●各視点からみた状況

- 6つのキーワード「文化」「女子」「美一まちなみ力」「繋がる一絆力」「食一味力」「体感一おもてなし力」を開催前に提案させて頂いた。これらの視点から、今回のひなまつり状況を捉えてみた。
1)文化(文化力)一篠山の育む文化を呼び覚まし、奥深さを魅せる
- 文化面の状況
多くの雛めぐりは「千体雛や巨大雛で目を惹く」、「ショーウィンドーに並び雛人形の出展数を競う」といった、「規模」を目玉に集客を図るものも多くみられる。これに対し、地域で豪商の古典雛が開帳される雛まつり(京丹后市久美浜)や、手づくり作品が展示される雛まつり(室津、亀山等)、まち並み建築の特徴を活かした展示が行われる雛

まつり（日野町のさじき窓）などは、普段は目にする事が出来ない、まちの深みを見せる機会となっている。

- 丹波篠山では、稲畑人形の掘り起こしを呼び掛けられ、作家の講演会や稲畑人形展なども行われ、文化性の高いものにされた。またいずれの会場でも、「稲畑人形」ほか、江戸から明治、大正、戦前までの味わいのある古典雛が展示され、今田の陶雛展示や福住の地元のパッチワーク作家の作品展示、丸山での雛人形コレクション展示、さらには市野々の住民一人一人が作られた案山子展示などにより、丹波篠山の雛めぐりは、篠山が育む文化の奥深さを示す機会となっていた。

●文化面での課題

- 「物語」を伝える、ちょっとした説明サインを制作年代や〇〇家所蔵など、人形や展示物の物語を伝える説明サインが、城下や市野々、福住、日置などで置かれていた。
- 案内人がおられる事であり、全てに説明サインが必要というものではないが、地域の人の温もりを伝えるものとして、会話のきっかけとして、また地域自身で歴史や文化を見つめ直す機会として、他会場でもこのような説明サインを活用して頂きたい。

●文化面での今後の展開として

- ①毎年、文化テーマを持つ雛まつりが、年中行事であると同時に、地域の文化を表出する機会—“篠山の文化祭”として位置取りできるようになればと考える。このため「稲畑人形」だけではなく、「雛掛軸・屏風」「古典雛」「手づくり雛と雛飾り」（作家や工房物、折り紙雛など市民の手づくり雛や、つるし雛などの雛かざり）あるいは「木と土の雛」「カワイイ」「和小物」「雛天神」などの注目点を毎年設定し、拠点会場の企画やクイズラリーなどの巡る仕掛けづくりなどを展開することが考えられる。

②篠山の個性として、「里山の雛まつり」のイメージをより印象づける

- 篠山在住作家ではないが、里の風景や人の温もりを人形で表現している「高橋まゆみ」や「渡辺うめ」などの女性人形作家展を全体の企画展とすることができれば、里山集落の雛まつりという、他にない篠山の雛祭りのイメージをより明確に印象づける事ができるのではないかと考える。

2) 繋がる(絆力)ー地域間の絆を深める

- 雛まつりは、各地域がテーブルを囲み知恵を寄せ

合い、地域間の絆を深める良い場となったと感じる。

- 城下以外の周辺会場に多くの来訪者がみられ、丸山等から提案された「スタンプラリー」は、7つの会場を巡って貰う事に大きな効果を果たしたと見られる。

- 課題：互いに案内の周知・会議で共通認識となっていた、城下から日置へ、あるいは雲部から市野々へなど、互いに案内しあおうという点は、日置・中立舎において福住や雲部への案内が行われているのを見かけたが、大阪教育大の碓田先生からは、他会場への案内がもっとあっても良かったという感想があった。

- 次年度は、こうした相互案内の意識を、役員だけではなく、住民一人一人に、今一度、周知を図っていく事が大切と感じる。

- 事務局への負担は相当であったと思われ、無理なく継続していくためには、各会場と有志の協力が必要と思われる。

●今後の展開として

- 巡らせる仕掛けとして、スタンプラリーのほか、篠山全体もしくは会場を広く展開している城下町や市野々で、歴文4館で行われたようなクイズラリー ‘〇〇で見られるお軸の数は?’ ‘案山子の博子さんを探せ’などの仕掛けも考えられる。
- また分散型の雛めぐりに対応するため、写真入りの案内マップパネルなどを作成し、各拠点会場においても案内しやすいかもしれない。

- 城下町会場だけでも広く見るポイントが掴みにくい感じがあるので、昼食とセットにした半日ウォーキングツアーなどがあっても良いかと思う。

3) 美(まちなみ力)ーまち並みの美しさを際立たせる

- 福住、市野々、城下、日置の4つの会場では、展示会場内だけではなく、まち並み全体を会場と捉えた演出が行われていた。

- 福住では、つるし雛やもち花による軒下や玄関先の‘街道村のまち並み飾り’は、黒竹を使うなどまち並みに合った細やかな心遣いがあり、短期間に数多くの飾り物がつくられた事に驚かされた。

- 市野々では、田んぼや里山、民家の縁側など集落全体を会場とした展開が図られ、案山子による誘導とともに場の物語づくりや、竹を使った花飾りなども素晴らしかった。多くの案山子祭りでは、沿道に一列に並んでいる場合が多い。ここでは、例えば橋の欄干から川面を覗く案山子、バス停に

- 集う案山子など、風景に物語を与え、人々を楽しませていた。
- 城下では、木製のサインプレートや絵手紙は、‘人の温かみを感じるまち並み飾り’として好評を博していた。
 - 日置では、着物のぼり旗と丹波篠山ひなまつりと記したタレなど、展示会場周辺が美しく彩られていた。
 - こうしたまち並みを魅せるという観点からは、できれば集落が見渡せる高台に立地する丸山公民館で、ベンチ周辺を、水仙等の花で彩ったり、集落の案内サインを設置したりなど、眺望ポイントとして活かして頂けたらと感じる。
- 4) 体感(おもてなし力) — ‘見るだけ’ から、体感と収益性のある取り組みへ
- 体感プログラムとして下記のものが行われた。
 - 今田：陶雛の上絵付け体験
 - 城下会場西町の陶々庵；折り紙葉づくり
 - 城下まち会館：お茶席
- また収益につながる飲食・物販等としては、下記が行われていた。
- 河原町鳳凰会館：甘酒、ひな団子販売
 - 市野々：ぜんざい、カレー他、木のおもちゃの販売
 - 「体験プログラム」の種類は多くはないが、先に記載したように、福住、日置、市野々、丸山や城下の陶々庵など、伝統的な家屋の中に入れて頂き、座談の交流の場がしつらえられている事が、体感面としても優れた点だと考えるので、こうした方向を今後も持ち続けて頂きたい。
 - 今田の絵付け体験は、手間がかかり人数的に多く確保できない面もあると思うが、体験プログラムとして大変良いものであると感じた。福住の顔出しや市野々の石ころアートプレゼントなど、ちょっとした遊び心が来訪客を楽しませていた。城下まち会館でのお茶席は、山野草展に埋もれて解りにくかった事と、できれば和室のある場所で行えれば雰囲気のあるものになったのではないかとと思われる。
 - 人気を博す金沢21世紀美術館では、アートを見せるだけではなく、如何に来訪者が関わりを持てる工夫をするかに力点を置いている。雛めぐりイベントも、雛人形を眺めるだけではなく、如何に地域の人やまち、建物、森や川などの地域がはぐくんだ風土に関わりを持てるようにしつらえていけるよう更に工夫をしていただければと感じる。

- 「物販」については、岡山県真庭市勝山や豊田市足助町、奈良県高取町、富田林寺内町など、成功例と言われる雛めぐりに比べ少なく、例えばタラの芽など山菜や野菜、つるし雛など雛かざりや手芸品、切り花など、来訪客の買う楽しみを増やせばと感じる。
- 「食」に関しては、どこで何を食べられるのか、情報が得にくいのが課題と感じる。
- 「パンフレットに食事処マップ等を差し込みで入れる」あるいは「食事処、みやげ処をマップに番号ではなくマークで入れ明瞭にする」「他のパンフレットに比べ枠が大きい協賛の頁に、おすすめメニューを写真入りで入れる、営業時間を明記するようにする」事も可能かと感じる。さらに、できれば協賛各飲食店がお雛様特別メニューを提供するように呼び掛けていければと感じる。
- 市野々や福住、城下などでは、主催者側が楽しんで行事を行われているのが伝わり、訪れた側も一層楽しい気分させていた。「おもてなし」とは、訪問客をせったいする事ではなく、その地の恵みに感謝して、訪れた人と地域の人とが共に楽しむ事だという事を改めて認識させられた。
- 情報発信
- 新聞各社への情報提供ほか、フェイスブックへの掲載など、各会場が情報発信につとめた事が今回の集客につながったと思われる。今後の情報発信への取り組みとして、下記等を検討していきたい。
- 少し前倒しでポスター、パンフレットを仕上げ、ホームページ掲載や配布時期を早める。(各会場の企画決定時期を早め、篠山 ABC マラソンに間に合わせるなどにより、雛祭りの前のイベントでパンフレットを配布する)
- 他の雛めぐり開催地にパンフレットを置いて貰う。(亀岡と福知山の雛めぐりでは、龍野のひなまつりパンフレットが置かれていた。この三地区とも旧暦で雛まつりを開催している。亀岡と福知山ともに、雛まつりの規模は小さく、交流効果はあまり期待できないかもしれないが、今後、ポスターやパンフレットを設置しあえば集客効果は互いに高まると考えられる。これら同時期開催地のほか、3月前半に開催している他の雛めぐり開催地にポスター、パンフレットの設置願を検討したい)

(3) 地域づくり支援事業

3) 企業と住民の協働による企業の森・里づくり (門上幸子研究員)

●目的

- ・本事業は、平成 19 年度から平成 25 年度にかけて丹波県民局が実施してきた「企業と住民の協働による企業の森づくり事業」の後を受け、活動が継続される6地区の森づくり協議会の活動を支援することを目的としている。
- ・なお、篠山市の「曾地中里の山づくり協議会」(地元：篠山市曾地中地区、企業・団体：特定非営利活動法人エコラ倶楽部)での森づくり協定期間(平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月)の終了を受け、本事業での支援対象地区は 5 地区となった。

●サポート対象地区

- ・平成 27 年度企業と住民の協働による「企業の森・里づくり」事業におけるサポート対象地区は、下記の森づくり協議会である。

①油井鎮守の森を守る会

(地元：篠山市油井地区、企業・団体：三菱電機株式会社神戸製作所)

②篠山宮代の里森林保全協議会

(地元：篠山市宮代地区、企業・団体：(株)阪急阪神交通社ホールディングス)

③遠阪アサヒの森づくり協議会

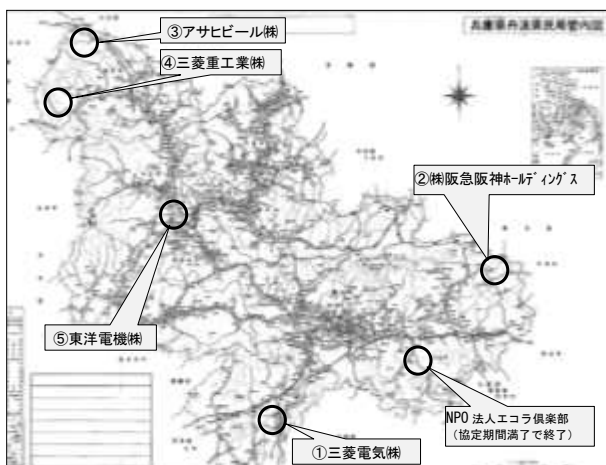
(地元：丹波市青垣町遠阪地区、企業・団体：アサヒビール(株)西宮工場)

④神船・大名草の森づくり協議会

(地元：丹波市青垣町大名草地区、企業・団体：三菱重工業(株)神戸造船所)

⑤甲賀の里森づくり協議会

(地元：丹波市氷上町成松連合区、企業・団体：東洋電機株式会社)



●サポート日程

- ・平成 27 年 4 月 13 日
遠阪森づくり協議会 (打合せ)
- ・平成 27 年 4 月 14 日
神船・大名草森づくり活動 (打合せ)
- ・平成 27 年 5 月 16 日
遠阪森づくり (活動日)



- ・平成 27 年 5 月 29 日
甲賀の里森づくり協議会 (打合せ)

- ・平成 27 年 5 月 30 日
神船・大名草森づくり活動 (活動日)



- 平成 27 年 5 月 30 日
神船・大名草森づくり活動（活動日）



- 平成 27 年 6 月 14 日
油井鎮守の森づくり協議会（打合せ）
- 平成 27 年 9 月 1 日
宮代森づくり協議会（打合せ）
- 平成 27 年 9 月 3 日
神船・大名草森づくり協議会（打合せ）

- 平成 27 年 10 月 17 日
宮代森づくり協議会（活動日）



- 平成 27 年 10 月 17 日
神船・大名草森づくり活動（活動日）
- 平成 28 年 2 月 8 日
甲賀の里森づくり協議会（打合せ）
- 平成 28 年 3 月 8 日
甲賀の里森づくり協議会（活動日）



2 自主研究助成

(1) フィールドミュージアム「コア施設」の研究(抜粋)

(塩山研究員)

●研究の背景と目的

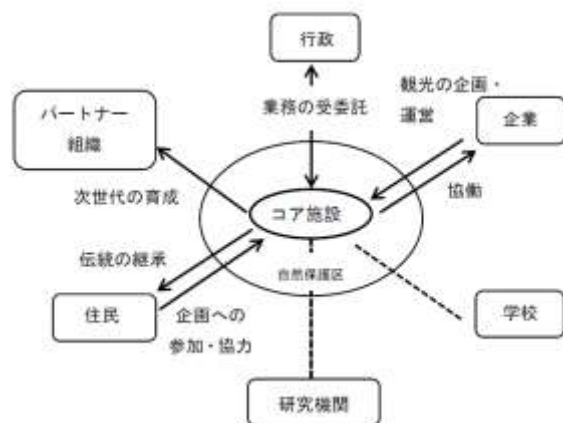
- 丹波地域では、丹波県民局ならびに篠山市・丹波市の両市を中心に平成 26 年度より「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム構想」を推進している。その中で、フィールドミュージアムにおける多様な情報の受発信の場、あるいは各関係者が当該区域にかかわる上での足場となるという施設としての「コア施設」は重要な位置を占めている。そこで本研究では「コア施設」のあり方に着目して研究を行うこととした。
- 本研究では、フィールドミュージアムにおける「コア施設」という存在に注目し、いくつかの具体的な恐竜化石等の自然系博物館及び環境学習施設におけるこれら施設の活用実態を明らかにし、「コア施設」が果たす役割について論じたい。

●「コア施設」が担う役割と課題

- 対象地域において「コア施設」が果たしている役割
- 今回調査した施設の事業項目は、大別すると「保全・保護、普及・教育、地域振興・観光」という大きく 3 つの働きに分けることができる。この 3 つの役割について、施設の現状を参考にしながら、コア施設に関わる関係者（ステークホルダー）とコア施設の関係を模式図として示した。

■図 3：地域振興・観光におけるコア施設と関係者

(注：-----ははっきりとした関わりがみられなかった関係)



●地域振興・観光におけるコア施設

- 過疎・高齢化という背景を抱え、自然資源を活かした地域振興が重要な政策的課題となる地方圏に

において、「コア施設」における役割が、地域振興・観光という機能の 1 つの大きな柱になることは特徴的な点である。

- 「コア施設」はフィールドミュージアムの立ち寄り施設として、また情報提供施設として、地域振興・観光に貢献している。
- 観光という役割を求められながらも「コア施設」が観光施設と呼べるのかは疑問がある。例えば、地域内やその周辺に位置する施設の立地条件は決して良いとはいえない。最寄り駅から遠い、バスの本数が少ない、マイカーやタクシーでないとアクセスが難しい点は、集客にはマイナス要因である。
- 観光施設として位置づけるのであれば、公共交通の利便性向上を図る必要がある。また施設が対象としている地域が、地域の中で観光対象として認識されていないという問題もある。
- 現状では施設側が観光施設としての機能を十分に担う体制でないのにもかかわらず、地域の中では観光を促進する場所として期待されているといえる。
- 一方でコア施設は、地域住民が自然資源に対する価値を見出し、環境意識向上を促す役目も担っている。過疎高齢化という構造的な問題を抱える地域では、友の会などのボランティア組織も総じて高齢化している。豊かな自然資源を将来に渡って支えていく人材の育成が課題になる。地域を学び、地域をつくる担い手を創出し、地域振興に貢献していくことがコア施設の活動に期待されるだろう。

●おわりに

- 本研究では、恐竜化石フィールドミュージアムにおける「コア施設」という存在に注目した。各地の事例を対象にコア施設の活用実態とそこに関わる地域の関係者との関係を検討した。
- 本研究により、「コア施設」は地域のマネジメントを考える上で重要な存在であることが明らかになった。日常的に自然の状態を把握し、調査研究活動によって自然資源の情報を蓄積している「コア施設」は、必要に応じて地域の自然についてアドバイスをを行っていることは重要である。
- 自然の情報だけではなく人材の情報も蓄積している。施設の活動を通じて、地域の関係者とのネットワークを持ち、地域課題に応じて彼らと連携し課題の解決を図っており、この点は今後の地域マネジメントにおいて極めて重要な役割と言える。

- さらに、パートナー組織や学校教育機関といった現在や未来の環境活動の担い手の育成も重要である。「コア施設」は地域の自然・文化資源の保全や活用において、地域の自然や人材のシンクタンクとして機能し、多様な関係者の調整役となることが期待されており、地域の「レジデント型研究機関*」であることが最も役割を發揮しうると考えられる。(＊レジデント型研究機関とは、地域社会の中に定住して研究を行う研究者を擁する大学、研究所などで、地域社会の課題に直結した研究を行い、問題解決に貢献することをその使命として明瞭に意識しているものを言う)
- しかし現実には、制度や財政的な面から、期待されるすべての役割を担うのは困難な状況にあると言える。自然・文化資源の適切な管理のためには、施設の機能強化が必要になるが、あわせて地域の関係者(地域住民、行政、企業、学校、大学等研究機関、ボランティアなど)に積極的に施設の活動に参画してもらい、施設の足りない部分を補強し、地域全体で「コア施設」を育てていく姿勢が必要となるだろう。

(2) 6次産業化に関する基礎調査(抜粋)

(門上^{幸子} 研究員)

● 研究の背景と目的

- この6次産業化という考え方は以前より存在していたものであるが、その言葉自体は比較的新しいもので、国が「6次産業化法」(正式名称は、「地域資源を活用した農林漁業者等による新事業の創出等及び地域の農林水産物の利用促進に関する法律」として制度化を行ったのは2010年のことである。したがって、自治体レベルでの6次産業化の施策に関しては、まだまだ動き出しの段階にあるといえる。
- 本研究では、こうした状況を受けて、6次産業化の方向を探ることは、これからの農業および関連産業展開の次の一步を考えるうえで重要な意味をもつ可能性があるという観点から調査を行った。
- 本研究は、主に生産者側の視点から見た6次産業化についての基礎となる事項の整理を行おうとするものである。この中では、地域を取り巻く農業および関連産業の現状と課題といった特徴を捉え、6次産業化の可能性を探りながら、地域における6次産業化の展開に向けて求められるポイントを提示した。

● 6次産業化の定義・理念

- この報告書の調査対象として扱う「6次産業化」についての概要とそれを巡る国等の施策を整理しておく。
- 「6次産業化」という言葉は、今村奈良臣東京大学名誉教授が1995年頃に提唱したもので、それから3年後に出版された「地域に活力を生む、農業の6次産業化」のなかにおい、農業の6次産業化とは、「農業が1次産業のみにとどまるのではなく2次産業や3次産業にまで踏み込んで農業に新たな価値を呼び込み、お年寄りや女性にも新たな就業機会を自ら創り出す事業と活動」と定義されている。
- この「6次産業」とは、1次産業+2次産業+3次産業=6次産業という構図で語られていたが、その後、1次産業×2次産業×3次産業=6次産業と掛け算で表されるようになってきている。これは、生産段階である1次産業の農業が零になれば、いくら掛けても零になってしまうという考えに基づいたものである。すなわち、生産者を主体においた地域農業の活性化にかかる議論が強調されるものである。

(略：事例調査)

● 6次産業化の可能性

(1) 6次産業化の重要ポイント

- 6次産業化の定義や手法、また具体的な取り組みを確認してきたが、これらは基本的な考え方を示すものであって、必ずしもこれらと同じである必要はない。
- つまり、「6次産業化といっても決まった方法が存在するわけではなく、方法は地域性との関わりのなかでつくられていくもの。その地域がこれまで積み重ねてきた特徴や置かれた状況をみながら、地域の特性に応じた展開をしていくしかない」ということであり、6次産業化という言葉に必要以上に縛られることよりも、今の地域農業に6次産業化の理念や考え方をどう活かすか、または地域に馴染む手法としてはどういったことが想定できるか、との視点から捉えることが重要となる。
- 6次産業化の可能性を検討する上で、次の問題があることに予め留意しておく必要がある。すなわち、6次産業化による取り組みとは、モノを作って売るという生産・販売活動である以上、ビジネスとして捉える必要があることに注意しなければならない。確かに、本稿でも強調する「地域全体の活性化」や「生産者の理念の実現」という目的

が望まれるものではあるが、それはあくまで取り組みの過程や結果として期するものであって、個々が取り組む活動は一定の利益を求めた経済活動である。

- 6次産業化の取り組みを成功させることは、池田牧場の事例でも示されたとおり、一定の投資や相当の勉強が必要になるため、この点が6次産業化の展開に向けたハードルといえる。事例を通じて、個人事業者による6次産業化の取り組みをみるとビジネスとしては途上段階にあるようで、理念や趣味としての取り組みを超えて、実際の利益につながるものになっていくことが課題として語られている。6次産業化で最も困難かつ重要なことは販売の段階であり、どうすれば「売る」ことができるのか依然として課題となる。
 - ここで取り上げた事例に限らず、全国的に6次産業化に関する取り組み事例は多々見受けられるようになったが、そうした取り組みの多くは未だ端緒的段階にあって、ビジネスとしての成功という視点に関わらず、6次産業化に取り組む動きとして紹介されることが多い。そうであれば、これまではこうした取り組み自体が今日の話題性ゆえに取り上げられるものの、今後は取り組みの結果として利益が出たのかどうか、という成果の部分が厳しく求められてくることに留意する必要がある。
 - 6次産業化を検討する際の留意点・視点
 - 前項でも確認したとおり、6次産業化とはその地域性に応じたアプローチがとられるため、特徴に応じた6次産業化を目指すことが望まれ、次のような点に注意して展開されることが望ましい。
 - ①生産、加工、販売という一連の形式にとらわれるのではなく、ひとまず生産→販売のかたちでもって自らで売ることに力点を置く
 - 地域で6次産業化を検討する際には、「生産者が生産→加工→販売を一貫して全て手がけるもの、という決まったかたちが存在しているのではなく、その地域の特性に応じたものになることが必要で、生産物や生産状況等によって6次産業化へのアプローチは変化するものである。
 - そのため、6次産業化とは、現状として取り組みが見られる1次（生産）→3次（販売）のさらなる充実や意識づけ等から考えていくということは、地域の特性からしてはありうること」との指摘がなされている。
 - 確かに、加工を本格的に行おうとすると、当然相当な投資が求められるものであり、同時に回収と
- いう視点も厳しく要求されることは言うまでもない。
- 6次産業は、1次+2次+3次が一つの想定される型ではあるが、6次産業化への取り組み初期にある地域では、ひとまず2次（加工）は他に預けて、1次→3次から充実させていくことで地域版の6次産業化として捉えることができる。
 - 6次産業化を進めるためには、まず、これまで多くみられた卸売市場ありきの「市場意識」から、生産者が自らで売っていく「直売意識」への転換が必要と考える。この意識変革を生産者に求めながら、それを地域全体で共有のものにすることが望ましい。
 - この点、卸売市場への出荷販売を中心とした従来の傾向から、生産者主体による直売形式への流れも生まれているが、他方で、農家の出荷物を直売所のみで受けきることは困難という問題を抱えている。すなわち、直売所と市場とを比べた場合、その扱える量の違いは明らかであり、直売所には生産物の一部しか置けないところに限界もある。
 - 直売所と市場が競合して同じパイを取り合うのではなく、直売所は直売所としての新しい農業生産者をつくりあげていき、さらには産地の核となるような直売所という方向を目指すことが一つの可能性として考えられる。
 - ②生産→加工委託→販売とのように他の事業体との連携を進めることで、加工販売への実現を目指すというアプローチを視野に入れていく
 - 例えば、調査事例の fm craic の活動スタイルからの学びとしては、生産者はモノを作ることに追われて時間がないなか、他の多様な事業体との連携という視点の重要性が強調されている。
 - ③6次産業化による商品で利益を生み出すことにこだわり過ぎず、多様な取り組みの一つに6次産業化からのアプローチがあるという柔軟なイメージでよい
 - 調査事例では、6次産業化による商品一本の展開というよりは、多様な事業展開の一つに6次産業化的なアプローチがあるかたちとなっている。また、卸売市場への出荷や直売が主である地域においては、農産物の加工の位置づけとしては、残渣や規格品外の生産物の有効活用という側面が強い。
 - 市内の生産作物に軟弱野菜が多くを占めるなか、一過性の新商品開発だけでなく、今あるモノを、6次産業化の視点を含めて、どう展開していくかも考えなければならない。

④農産物の品質を PR する

- 本地域では黒豆や丹波栗などの高い品質を誇る農産物の存在があることから、このブランド強化や魅力の発信が望まれる。
- 一般的には、農産物の加工による付加価値の創出が大きい課題としてあげられるが、現状で取り組める手段としては、収益の見込みに不安を抱えながら加工による商品開発一本で進めるといよりは、今ある生産物を少しでも高い値で売る方法を考えることも欠かせない点である。
- 消費地への供給産地としての役割を担っているといえる。ともすると、農産物自体には品質の良さや安定した供給体制は強みであることから、こうした魅力をどう消費者へ訴えるかという点は依然重要なテーマとなる。
- そのアプローチとして、丹波地域産のブランド化や農家直売方式によるマルシェやアンテナショップ等を通じて地域産の魅力について消費者への訴求力を高めていくことが求められる。
- 他方で、一定のブランド力を有している京都の特徴をみると、小規模農家が多くを占めており、個々の農家が特定の店とのつながりのなかで少量多品目を生産して生き残っている。たとえば、滋賀産の野菜と同じ棚に並ぶとき、京都産の野菜は「京野菜」を示すラベルが付くことで、それよりいくらか高い値が貼られて売られているのが現状である。
- このブランド化という観点からすると、野菜にも付加価値をつけていくことが求められるが、地域の農業には高い栽培技術を有する野菜の専業農家の集積に特徴があることから、栽培等の技術力としては他の市場に優位しうるポイントだといえる。

⑤大消費地に近いという地理的特徴を活かす

- 地理的特徴である大阪や阪神地域といった大消費地への近さは、産地のすぐそばに多くの消費者がいるということなので、新鮮野菜や特産品を気軽に買いに行ける場所というイメージの構築が期待される。この点、市域に農産物の販売機会がさらに広がることを望ましいが、市内に現存する主な直売施設の立地は生産地側に位置しており、人が集中する市街地から離れたものになっていることが一つの課題といえる。
- これに関連して地域活性化について考えると、地域産地作物を活用した農家レストランや直売所等といった展望が語られている。そうした意味で、地域の中に産地を PR するようなアンテナショッ

プを設置するなど、より消費者側に近づいた地域の中核市街地の中での展開も考えられる。

⑥少量多品目型生産への意識を持つ

- 農産物の特徴として品目数の少なさが挙げられるが、消費者ニーズへの対応や加工産品開発等の観点からは、多様な野菜・果実へと少量多品目型の生産にも力を入れることが望まれる。
- 卸売市場を介した流通が基本にあるため、ただちに少量多品目型生産へ切り替えるというよりは、まず、こうした認識を持ちながら、段階的に展開されていくとよい。
- これまでも多様な農産物の生産が見られるが、これからさらに手をつけようとする、生産者の高齢化・減少が進むなかでは、拡がりを望むことも難しく、また季節物の果実に専業で取り組むことの困難性もハードルとなる。
- こうした状況に加え、卸売市場に向けた地域の農業においては、完全な少量多品目型生産を行うことは困難であるものの、これからの直売運営等の展開を考えると、複数品目の野菜を同時に販売して消費者のニーズに応えながら販売額を確保する、といった視点の重要性は認識しておかなければならない。

⑦生産者による生産者のための6次産業化を目指す

- 6次産業化を生産者・産地の活性化に向けたものとする、その取り組みは生産者が自らに目的を持ち、主体となって動いていくものである必要がある。関連して、農商工連携に対する指摘に目を向けると、生産者は材料づくりに終始し、付加価値のほとんどを流通販売の方が吸い上げてしまうようなケースには注意が必要である。よって、いかに農業の色を残しながら、生産者主体での取り組みになるかが重要となる。
- 例えば事例では、分野毎の勉強会が立ち上げられたとあるように、生産者同士による学習グループが地域内でさらに広がることで、モノの作り方、加工方法、売り方等にかかる議論とアイデアが生まれ出されるなど、生産者自身が売れるモノづくりを考えて発信する場所となっていく可能性もある。

●6次産業化の今後

- 6次産業化の動きに向けた議論が始まった段階であるが、少しずつ意識の拡がりが見られ、6次産業化の動き出しの芽が徐々に見え始めている。
- 今日の6次産業化の取り組みの一端としては、地元産の野菜を加工して漬物にしたものや、軽食コーナーとして新たにファーマーズカフェがオーブ

ンし、地元で採れた新鮮野菜を活用するなど、地域産を発信する役割に期待が寄せられているところである。

- また、今後の農業振興の行方を考えると、ブランド化や6次産業化等といった施策の検討に加えて、消費者が産地を知ること、また生産者が消費者を意識すること、そして生産者と消費者とのより近い関係を構築していくことが大切に思われる。
- 今後、6次産業化の推進が望まれるとはいえ、一足飛びで生産者が全てを担うことは難しいため、こうした消費者の声を直接生産者に届ける機会を作っていくことで、この消費者の声に生産者側が応えられるような動きに繋げていけるとよいと考えられる。
- 地域の取組や伝統文化などを聞いた人の中には、これからは「〇〇産」という名前を見たら買おう、という声もあり、こうした“〇〇ファン”を増やしていくことが、消費者に産地を知ってもらうということの意味でもある。
- 地域の現状として市場への出荷までが生産者の役割としていた向きがあるなかで、これからは、生産者と消費者との接触の機会を増やすことで、消費者の満足のために我々の手でもう一つ工夫をして取り組もう、とする意識の拡がりが見られていく可能性もある。

●今後の検討課題

- 本報告書では、6次産業化に関する基礎的事項を整理したが、今後は、より具体的な展開に向けた検討が望まれる。ここでは、今後の検討課題として挙げられた下記の5つの事項を記す。
 - ①規格品外の野菜や農産物の残渣を有効に活用する方法とはどのようなものか。
 - ②消費や販売、また流通といった観点から見た6次産業化はどのようなものか。
 - ③地域農産物のブランド化を展開するためのアプローチを探る。
 - ④地域で生産された農産物を地域で消費するという、地産地消の仕組みづくりの可能性を考える。
 - ⑤最近では少量にカットされた野菜や惣菜で済ませる傾向の強まり等、消費者の食生活や家族形態等の変化に沿った農産物の生産や販売のあり方を見直す。